

大阪から世界ブランドを ～まいど1号～

青木 豊彦*

企業レポート

A Big-name brand accepted in the world is now born from Osaka

- Lightning Observations from Space : Maido-1 Satellite Project -

Key Words : satellite observations, lightning discharge, small satellite



1. はじめに

今回、幸運にも本誌に寄稿させていただく機会をいただいた。本年1月23日に、念願の東大阪発人工衛星「まいど1号」が打ち上げられ、現在も順調に飛行を続けている。人工衛星打ち上げの地元パワーは素晴らしかった。東大阪は技術の街として全国に知られ、地元は盛り上がった。私も種子島で打上げを目の当たりにし見送った人工衛星が、写真や雷観測のデータを地上に届けている事実に触れ、大いに感激しているところである。この機会に、東大阪、町工場発人工衛星プロジェクトを立ち上げた頃のことを振り返ってみたい。

2. ものづくりの街・東大阪

私が「モノづくり親善大使」を拝命している東大阪は、1平方キロメートル当たりの工場数が日本で、中小企業の町、モノづくりの町として有名である。その大半が従業員30人以下の所謂中小企業であるが、他所には真似のできない“オンリーワン企業”が120社はあると言われている。そんな東大阪でも、一時は1万社以上あった会社が、人工衛星プロジェクトを立ち上げた今から7,8年前には、ほんの数時間で8千社を割り込むまでに減少する状況であった。原因はバブル崩壊後の不況。しかし、「今回は違

な」と感じていた。地元が真っ暗や。何故か？ 後継者がいない。中でも、若者がモノづくりに参加している確率がものすごく少ない。企業数の減少は、潰れたのではなく後継者不足が原因でやめざるを得なかったということも多数に上る。それなのに、その頃聞いたニュースでは、若者の失業率が十数パーセント。「ニート」という言葉をよく耳にするようになった頃のことである。一方で、東大阪は人材不足。こんなアンバランスなことが、なぜ起こってしまったのだろうか？ あまりにも製造業に暗いイメージがあったからだと思う。テレビでは、裸電球の下でおやっさんが旋盤を動かし、鉄くずの中を猫がちょろちょろ歩いている光景が映される。職人の奥さんが子供に「お父ちゃんみたいになったらアカン」などと言っている。これはいくらなんでもイメージが悪すぎる。キツイ、キタナイ、キケン「3K」と言われたのも、大きな原因だろう。国や色んな機関が、モノづくりが大切だ、モノづくりを見直さなければいけないと言っているこのご時世、我々製造業をやっている者が若者に語りかけていないというのも大きな原因かなと思っていた。東大阪商工会議所から「東大阪を明るくする花火師になってや」と持ちかけられたのは、丁度その頃だったのである。

3. 航空機との関わり

このままではアカン、東大阪を若者が集まる“モノづくりのアメリカ村”にしよう。若者が興味を持つ仕事、将来のある産業を創出して行かなければという中で、最初は「ロケット」を作ろうと考えた。子供の頃から漠然と宇宙が好きで、会社では飛行機の部品を作っていたからだ。人の縁というものは不思議やなあとも思うのだが、ウチが航空機の部品製作に参入したきっかけは、ある材料メーカーさんに部品を取りに行ったとき、工場長さんから航空



* Toyohiko AOKI

1945年9月生
大阪工大付属高校卒(1962年)
現在、株式会社アオキ 代表取締役社長
東大阪市モノづくり親善大使
TEL : 06-6781-5141
FAX : 06-6781-3921
E-mail : aoki_t@aoki-maido.co.jp

部品メーカーの担当者を紹介してもらったことである。もちろんすぐに注文を取れるわけもなく、神戸にあったそのメーカーに毎週、1年間通い続けてようやく図面をもらい「ほな、見積もり出してみい」と購買の方に言われたのである。ところが、横文字ばかりで全然読めない。そこで、航空機の仕事の仕事をしたことがある人に見てもらったら、「今のアオキの設備では不良の山になるからやめとけ」と。それで図面を返しに神戸に行ったところ、先方の態度が変わった。こちらが安請け合いしたら発注を断るつもりだったそうだ。それだけ難しい図面を渡されたのだが、結局は社員が一丸となって取り組んだおかげで、仕事をもらうことができた。ここまで業態を転換してきた理由をよく聞かれますが、強いて言えば、自分の中にある好奇心かと思う。それをもとに時代の流れを常に迫っていったということかもしれない。好奇心のままに技術を追いかけていたら、次に何をすればいいかが自然に見えてくるものである。

4．東大阪発の人工衛星への道

話は少々横道にそれたが、製造業の現場は皆、下積みの時期を経て、伝統の技、独自の技を身に付けて行く。確かに地道で地味な職業かもしれないが、もう少し夢のある仕事ができないだろうか、若者が魅力を感じて集まってくるような町にできないだろうかという強い思いで「ロケット」をやりたいと本気で思った。その後、大学の先生やJAXA（宇宙航空研究開発機構）の研究者からのアドバイスも受け

て、ロケットは開発費がかかり過ぎることが分かった。大企業の傘下に入ってしまうようでは意味がない。でも、小型衛星なら、設計から実際の製造まで、すべてを自前でできる可能性があると知らされた。東大阪に地場産業を興すなら、これやと考えた。聞いてみれば、中小企業にもってこい。何故なら、どれも一品もの。大量生産では大手企業に敵わないかもしれないが、一品勝負なら負けなとの自負がある。もともと、「歯ブラシからロケットまで」の技術力が誇りの町にあって、いつでも“旬”の技術が必要な宇宙開発。そこで町工場のスピードとフットワークが必要になると思う。宇宙経験者からの技術移転などで力を付ければ、宇宙ビジネスが起こせると信じている。

5．おわりに

紆余曲折を経て、多くの人に助けをいただきながら、遂に「まいど1号」は今年1月に宇宙へと旅立った。「1号」と名付けたように、これがゴールではない。2号、3号と続くべく、昨年には、大阪大学工学研究科の河崎教授らと共に有限責任事業組合（LLP）航空宇宙開発まいどを設立した。需要は国内外に結構あると思う。将来はノウハウを蓄積し一般民需用に技術移転もやっていきたい。また、“まいど1号”でモノづくりの面白さを知った若者に働く場を提供し、宇宙産業を目指す中小企業の底上げを図りたい。「大阪から世界ブランドを!!」を合言葉に、まだまだこれからも頑張っていきます。

